
朧月

藤藤ワタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朧月

【Nコード】

N0896Z

【作者名】

藤藤ワタル

【あらすじ】

とある幼なじみの二人の会話。そこで彼等は何を思ったのだろうか？

短編二作目です！短い作品なので、気軽に読んで下さい。

「朧……、どうして私の名前は朧っていうのかな？」

開け放たれたガラス戸。その先にあるベランダの手摺りに背中を預けながら、彼女――黒に限りなく近い紺の長髪をたなびかせる我が幼なじみ、望月 朧は不意にそう呟いた。

「なんだよ、いきなり」

「いやね、何を思って私の両親さま達は、娘の名前に朧なんて文字の入った名前をつけたのかなーって」

なんとなく気になったの。と、朧は手摺りに首を乗せて夜空を見上げながら言った。

「なんだ。俺はてつきり、お前が自分のことを下の名前で呼ぶ、痛々しいぶりっ子にでも目覚めたのかと思ったよ」

そんなんじゃないよーと言う朧は、夜空を見上げたまま。

それにしても唐突な問いだな。俺は勉強方面に関してはあまり頭のよろしい方じゃないから、漢字について得に詳しいわけじゃないんだけどな。

「肉月に朧……、肉付きに朧……、肉付きのいい朧……。ああ、ぴったりじゃないぐへっ！」

無い頭を必死に捻って出した答えは、ベランダから飛んできたサ

ンダルによって遮られてしまった。

「私そんなに太ってないもんっ」

頬をぷくーっと膨らまして怒った表情を作る臃。

……別に俺は体型のことを言っただけではなかったんだけどな。
ほら、その……胸的な意味で、ね？

「……今、けーちゃん嫌らしい想像したでしょ」

「め、滅相もございません！そんなことこれっぽっちも考えておりません！」

だからその振りがぶったもう片方のサンダルを下ろして！

「でもけーちゃん、さっき私の……その、胸を、見てたし……」

「そ、そんなことはないですよ！見てない見てない！えーとあーとその……、そう！臃さんは貧乳です！無い乳です！だから見てませぐべっ！」

結局もう片方のサンダルも、見事に俺の顔面へクリーンヒットした。

「もう……、けーちゃんのばか」

ぶすーっといじけてしまった臃。何故か顔が少し赤いけど、興奮しすぎたか？

ちなみに、けーちゃんというのは臃だけが使う俺のあだ名だ。俺のフルネームは志島圭介で、圭介だからけーちゃんだそうだ。

それにしても、月は置いとくとして龍は合ってるよな、絶対。

「けーちゃんはいっつも失礼なこと言うよね」

「うーん……、別に意識して言ってるわけじゃないんだけどな」

「だから余計にたちが悪いよね」

「うっ……」

さっきとはうってかわって、会話のペースを臃に持っていていける。

まあさっきまでも、俺に会話のペースがあつたかというところでも違う気がするけど。

「ほんと、けーちゃんは『天然』だよな」

「その属性は男子が持つても意味無いだろ……」

言葉の攻撃で満足したのか、臃はすっかり機嫌を直していた。

「あーあ、やっぱりけーちゃんに聞いたのが間違いだったのかな？」

サラッと酷いこと言うな、おい。

「分かった分かった。ちゃんと考えるからそれ以上俺に失望しないでくれ」

そうは言っても、朧、朧ねえ……。

「……俺は別に漢字とか得意なわけじゃないけど、朧ってぼんやりとしたとかいう意味だっけ？」

望月の方は、確か満月って意味だったと思う。

「朧、望月、ぼんやりとした満月………あ」

……あ。

「どうしたの、けーちゃん？何か閃いた？」

「………いや、何でもない」

「えー？嘘、何か思い付いたんでしょ？教えてよー」

「何でもないったら何でもない！」

……美し過ぎる満月を雲の内に隠した女性、なんて恥ずかし過ぎ
て言えるわけがないじゃないか。

「本当に何でもないよ。ただ、お前が朧でよかったって話」

「えー、なにそれ？」

「何でもない。ほら、もう今日は夜遅いから帰れ。いくら家が近い
からって、夜道は危ないぞ」

「うー……、分かった。それじゃ、帰るね」

「おう、送ってくよ」

そう言っつて、俺と朧は部屋を後にした。

神様は、その美し過ぎる満月を雲の内に隠した。

少し強暴なその雲は満月を覆い、人々は夜空を見上げる事をしない。

だけど、俺は違った。生まれた時からずっと満月の側に居続けた俺は、雲の内側……美しい満月を知っている。

誰も知らない、その美しい満月を知っている。

雲に覆われた朧げな満月も、その内側の満月も、全て知っている。

そして、これからもずっと側に居続けたいと思う。

だから本当に、彼女が朧でよかったと思うよ。

End

（後書き）

皆様、こんにちは（こんばんはかも？）。短編二作目を投稿させていただきました、藤藤ワタルです。

前回の投稿から大分間が空いてしまいましたが、この間にはたくさんのことがありました。

テストがあつたりテストがあつたりテストがあつたりテストが（いろいろな意味で）終了したり……。

と、とにかく。これからは三日に一度くらいのペースで投稿出来たらいいなと思っているので、よろしければまた見に来て下さい！

それでは失礼いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0896z/>

朧月

2011年12月3日13時56分発行